

# 共に悲しみ癒やす

中皮腫や肺がんなどアスベスト（石綿）関連疾患で大切な人を亡くした悲嘆を慰め、寄り添う「グリーンケア」に、医療の専門家が取り組み始めた。兵庫県尼崎市のクボタ旧神崎工場の周辺で大規模な石綿被害が明らかになった「クボタショック」から6月で15年。今も患者が増え続ける中、悲しみを打ち明ける機会を得て癒やされる遺族も多い。【芝村侑美、写真も】

## 医療専門家取り組み

聖路加国際大大学院看護の支援も必要だと考えた「学研究科准教授の長松康子

さん(54)は、自身の長女が通っていた保育園の改築工事の石綿飛散で長女が暴露し、不安を抱えることになった経験から被害者支援に取り組んできた。

暴露から発症まで平均40年程度と非常に長く、尼崎の被害が社会問題化する以前にはあまり知られていなかった石綿関連疾患。長松さんは「当初は病気を発見できなかったり、病院をたらい回しにされたりするケースも珍しくなかった」と振り返る。医療関係者への周知が進むにつれて、「患者さんはもちろん大事だが、傷ついた遺族へ

の支援も必要だと考えた」と話す。

石綿は2006年に使用が原則禁止されるまで長く断熱材などに使用され、どこで暴露したか分からない患者もいる。遺族の中には労災認定手続きのため、何十年も前に暴露した状況の立証などに追われ、悲しむいとまがない人も。長松さんは「石綿関連疾患の認知は進んでいるとはいえ、周囲の人に分かってもらいにくい苦悩がある」と明かす。

19年11月中旬、大阪市内の一室で開かれたグリーンケアの会に約10人の遺族らが参加した。悪口を言わない▽個人の考えや気持ちを

尊重する▽聞いたことは口外しない—などのルールを決め、自己紹介してからグループに分かれた。

順番に自身の経験を打ち明け、「分かります」「それは大変でしたね」とうなずき合い、涙ぐむ参加者たち。母親を悪性胸膜中皮腫で亡くした女性は「わだかまりを初めて吐き出すことができて、胸のつかえがと

## アスベスト(石綿)を巡る主な動き

1970~90年	断熱材などに多く使われる
95年	国が毒性の高い一部の種類について使用を禁止
2005年	クボタ旧石綿工場の周辺住民の中皮腫発症を毎日新聞が報道(クボタショック)
06年	石綿健康被害救済法を施行。アスベストの使用を原則禁止
08年	改正石綿救済法を施行。労災時効の救済枠などを拡大
10年	指定疾病に「著しい呼吸機能障害を伴う石綿肺」などを追加
11年	東日本大震災で倒壊した建物の解体現場などでの飛散が問題化
12年	アスベストの使用を全面禁止(猶予措置を撤廃)
17年	災害時の飛散・暴露防止対策を徹底する環境省のマニュアルを改訂

れた」と話し、熊取絹代さん(60)は「父が亡くなってからも、自分は頑張らなければと泣いている暇もなかった。今日はただ父を思う自分になれた気がする」と語る。

長松さんは17年、中皮腫で配偶者や子供を亡くした30代〜80代の約75人にアンケートを実施し、結果をまとめた。石綿が原因で家族が発症したことについて、8割が激しい怒りを感じる

と答えた。悲しみで今でも生活に支障があると答えたのは9割。患者が亡くなるまでの期間について、8割が予想より早かったと回答し、厳しい予後にショックを受ける人が多いことがうかがえる。

長松さんらの活動に協力する聖路加国際大大学院の小野若菜子准教授(50)は、看護職によるグリーンケアを長年研究してきた。遺族らが深い悲嘆を抱え続ける

と心身のバランスを崩し、健康の悪化や死亡のリスクを高めることがあるとい

大阪市内の一室で開かれたケアの会で話をする長松康子さん(左から3人目)ら▽大阪市で2019年11月



い、小野さんは「病気の予防という観点からもグリーンケアは大切」と話す。ケアの会では、他者の発

める。